創刊１周年記念特別対談

「県と大学の連携による地域活性と国際展開」

高橋姿新潟大学学長　米山隆一新潟県知事

【コーディネーター】
地域活性化モデル　山田彩乃

米山知事

積み重ねてきた医学交流

山田　本日のテーマは「新潟県と新潟大学の連携による地域活性と国際展開」ということですが、新潟大学では古くからロシアとの医学交流を行っています。どういった中身なのでしょうか？

高橋　医学部、医学生の交流をスタートして25年になります。夏休みの期間を利用して、ロシア極東三都市の医科大学の学生に新潟に来てもらい、それぞれ希望する診療科で勉強して行くという。逆に新潟からもロシアに留学する。そうした実績が認められて、平成26年に文科省の「大学の世界展開力強化事業」に採択され、一層加速がつきましたね。その後はただ単に人材交流するだけでなく、シンポジウムを開催するなどさらに充実したものに発展しています。今年からは北海道大学とペアを組み、ロシア極東だけでなくモスクワも含め、医学分野に限らず農業や工業の面でも交流を進めています。

山田　米山知事も、今年7月にはハバロフスク、ウラジオストクの医科大学を訪問されたそうですね。

米山　（新潟大学とロシアの）交流の歴史が非常に深いこと、信頼が厚いことを感じました。学術の面では世界的にレベルの標準化が進んでおり、ロシアでも高い水準にありますが、大衆医療となるとまだ差がある。予防医学、生活習慣病などの分野では浸透が遅れている面もあり、新潟大学から吸収したいと言っておられました。新潟大学に留学されて、向こうで活躍されている医師の方も多く、非常に高い評価をされていました。

高橋　例えば胃カメラや大腸ファイバーなどは非常に日本の技術が優れているので医学生だけじゃなく、ヤングドクターも招聘して、そうしたテクニックを伝えているのです。中には学生時代、大学院時代と合わせて3回新潟で学んでいるドクターもいて、そういう方が大学内で指導者になっていると「新潟大学で学びなさい」と勧めてくれるのです。また与えるばかりでなく得るものも大きい。グローバル社会では、感染症などは何処にでも表れます。ロシアに多い感染症を学ぶ機会にもなります。

米山　（ロシア視察の際）様々な面で連携ができますね、という話をした。それぞれの国にそれぞれの人々がいて生活習慣も違う。そこで研究の幅が広がる。

山田　新潟大学のどんな部分をロシアに伝えたいですか。

高橋　新潟大学の強い領域は脳神経疾患や腎臓病。人工透析などロシアではほとんど普及していません。これらを含めて教えて行きたいと思います。

米山　ハバロフスクには日本の医療機関が進出して日本式の健診センターを開いているが、利用しているのは富裕層ばかりでなく、現地の医療に信頼がおけない一般の人たちも費用をかけて診療を受けている。そうした事実を踏まえると、将来的には大学病院のサテライトをロシアに作るなんていう夢も広がります。

産官学連携と農業交流

山田　医療医学は非常にすそ野も広いのですが、この分野における産官学連携についての県の取り組みについて知事からお話しください。

米山　県央基幹病院においては医工連携を進めていきたい。また県で打ち出している医療ビッグデータの解析と活用については最終的に、それを産に公開していきたい。必ずや産業界のシーズとなるものもあるでしょう。

高橋　大学の中では医学部と工学部の連携というのが活発に行われ、微細な電極や人口関節などの開発で実績につながっています。

　また官との連携で大きいのは、大学病院の分院とも言える位置づけが実現した魚沼基幹病院が挙げられますね。

山田　ロシア交流に話は戻りますが、いま進んでいる農業交流について高橋学長からお話しください。

高橋　今実際に進めているのは大豆ですね。国内で消費される大豆の4分の3は輸入に依存しています。また大部分は北米、中南米からの輸入で、長い航路の果てに豆が劣化してしまう。例えばロシアで大豆を栽培して日本に輸入する手段はないかという。ロシアからだとバラ積み貨物船でたった2日で着くし、低温なので劣化もない。しかもそれが遺伝子組換えのない安全な作物であればなおいい。そこで今、ウラジオから100キロ程度離れたウスリースクにある沿海地方農業アカデミーの農場で実験的に栽培を始めています。

　もう一つは、これ意外ですが朝鮮ニンジンです。ソ連時代に唯一沿海地方にだけ薬用作物専門のソフホーズがあり、今でもその名残で栽培している農家があるようです。知事が視察に行かれたパシフィック医科大学の紋章にも朝鮮ニンジンがあしらわれています。一方で、現代の日本の医学教育においては漢方治療のカリキュラムが義務化されており、これからの医療現場ではますます身近な存在になります。高価で栽培に時間がかかる朝鮮ニンジンの需要が高まる中で、ロシア産のものに期待感は増します。

米山　視察で見たのは、日本の企業が進出して現地で野菜の温室栽培に積極的に着手している姿。ロシアでは野菜はほとんど中国からの輸入ですが、新潟県の栽培技術をもって現地で生産し、ロシアで売れれば新たな産業です。

新潟清酒の連携協定

山田　先ごろ、新潟県と新潟大学、新潟県酒造組合で「日本酒学」についての連携協定を締結されました。これについてお話しください。

高橋　この話は経済学部、農学部の先生から提案されたものです。醸造学に関しては農学部の領域、日本酒のマーケティングに関しては経済学部ですが、せっかく総合大学なら包括的に連携して取り組めば、文化・歴史や健康など様々なアプローチができるのではないか、と。県の酒造組合も非常に熱が入っていました。今、酒造組合には日本の醸造学の権威である平田大先生（朝日酒造常務でもある）がいらっしゃって、新潟大学でも講義をしていただいています。県の醸造試験場には新潟大学の学生もインターンシップに行っている。もともとできあがっていた形があったので、話は早く進みました。

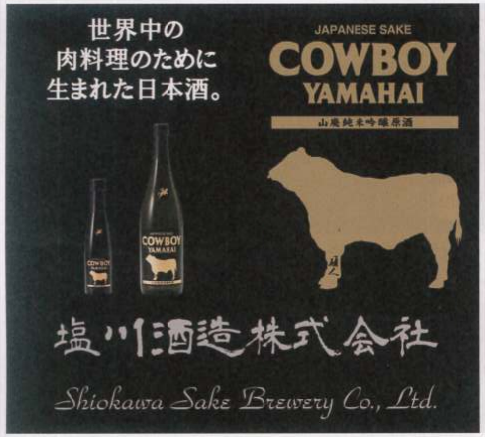
　また経済学部の女子学生が「日本酒が飲めない女子大生が作った日本酒」というビジネスプランを発表し、米大使館主催のコンテストで優勝、シリコンバレーで研修に招待されたという事例もあります。

　これまで幾多の連携協定を結びましたが、こんなに注目度の高いものはありませんでしたね。

米山　ぜひこれは総合大学の利を活かして複数の学部で進めていただきたい。ワインが世界的にもてはやされるのは体系的に分類が進んでいること、味の表現方法が多彩であることに理由があると思います。日本酒にもそんな分類や表現方法を文学的なアプローチからできれば、グローバルに受け入れられると思います。別に新潟の酒に限定的になる必要はない。日本酒というのは県のくくりでは比較的共通した味の傾向になっていますが、ひとたび県境をまたぐと全く違う味になることが多いのです。これを比較し、分類を進めることが、日本酒のブランディングにつながるのではないかと思います。

高橋学長

山田彩乃


世界中の
肉料理のために
生まれた日本酒。
JAPANESE SAKE
COWBOY YAMAHAI
山廃純米吟醸原酒
塩川酒造株式会社
Shiokawa Sake Brewery Co., Ltd.

Eurasia Train Direct
Sea and Rail Moscow
世界日通。
あなたのグローバルビジネスをフルサポート。
モスクワ向けFCL大幅効率化
Sea and Rail Moscow
新潟港～ウラジオストク～モスクワ　一貫輸送（海上・鉄道）サービス
日本通運
NIPPON EXPRESS
新潟支店グローバルロジスティクス課
新潟県新潟市中央区上大川前通5番町68番地1　TEL:025-228-0219　FAX:025-222-220
新潟海運支店国際輸送課
新潟県北蒲原郡聖籠町東港3丁目432番地16　TEL:025-256-1177　FAX:025-256-335